# J・ロンドンのボクシング小説

辻　井　榮　滋

## I

かのジョージ・オーウェルは，かつて「荒々しい暴力を描かせたら，ジャック・ロンドンの右に出る者はいない[1]」とまで評した。ひと口に暴力とは言っても，その中身は多種多様であろう。大自然対人間，大自然対動物，人間対動物，人間対人間，あるいは動物対動物といった関係が想定できるが，J・ロンドン（1876—1916）の作品群はこれらの関係のいずれをも数知れず包含している。そして，そうした荒々しい暴力は，彼の人生——とりわけ幼少の頃から少・青年期を通じて——との深いかかわりなしに文学化たり得なかった。その原点とも言えるべきものは，すでに前稿[2]で多少触れたが，殴りあいやけんかであった。彼の年譜を繰ってみると，自らも殴りあいやけんかに荷担したに違いないと思われる事件や事故や出来事あるいは仕事が頻々と現われる。殴りあいやけんかは，勝者と敗者の論理が明快である。そうした長い間の数々の体験も手伝って，人間同士がこぶし２つを武器に殴りあう原初的なスポーツであるボクシングに彼の目が向いたのも，無理からぬことであった。彼のいわば竹馬の友であったＦ・Ｉ・アサートンは，“Jack London in Boyhood Adventures” と題する285ページに及ぶ，ジャックとの少年時代の思い出を綴った文章を残しており，それ自体がジャックの少年時代の行動の貴重な証言になっているが，ボクシングとの関連では，

> After lunch, sometimes Jack would go to visit certain friends who enjoyed boxing or fencing and other rough sports. Occasionally these same friends would visit Jack, and they would box in the little back yard. ……[3]（以下略）

の通り，ジャックがボクシングやフェンシングに興じるさまがかなり詳細に語られている。この箇所は1903年頃のことと考えられるが，その後の作家生活中もほぼ一貫してボクシングに関心を持ちつづけた。単純に４つのボクシング小説の出版年を順に列挙してみるだけでも，1905，1909，1911，1911となる。したがって，幼少時から青年期にかけての殴りあいやけんかは，“such brutalities left him with a liking for their civilised counterparts[4]” として，のちにも長く尾を引くことになったのである。

たしかにボクシングは，最古のスポーツの１つである。敵からの攻撃に対して防御本能がとる

最も直感的・直接的・基本的スタイルは，両手――ベア・ナックル（素手）――か足による攻撃であろう。（棒切れや丸太あるいは石を武器として使いだすのは，人類史をはるかに下ってからのことである。）その意味で，まさに「原初的な」スポーツなのである。そんなスポーツに思いを馳せて，ロンドンは4篇のボクシング小説を残した。本稿では，スポーツ小説の先駆者[5]と目されるロンドンの趣の異なるボクシング小説を4篇とも取りあげてみたい。

## II

4篇とも取りあげるとなると，紙幅が足りなくなるのではとの懸念も出てくるが，1篇ずつ別々に稿を起こすのならともかく，多少各論がコンパクトにはなっても，やはりこの4篇は1度に本稿の中で取りあげたほうがいいだろう。

取りあげる順序は，本の形で出版された年の順に従うこととする。そこで，まずは『試合』(*The Game*) から。ロンドンの最初のプロボクシング小説である。1904年の8月に執筆を開始し，同年9月29日[6]にはカリフォルニア州グレン・エレンにいるチャーミアン（まだ妻のベシーとは正式に離婚していない）に原稿を送っている。1ヵ月半から2ヵ月足らずで書きあげた勘定になる。そして，10月3日には早くも原稿をマクミラン社に発送している。詳しい経緯はわからないが，マクミラン社のジョージ・P・ブレットに宛てた1904年11月17日付のロンドンの書簡によれば，“*The Game* is not a magazine story —— I don't expect to find a magazine that will dare touch it.”[7] とある。当時のオーソドックスな発表パターンであった，まず雑誌掲載ののち書籍として出版するという手順が踏めそうにない，との判断である。そしてその原因は，どうやらこの作品の語数が少ない点にあったようだが，12月8日付のブレット宛の書簡には，the *Metropolitan Magazine* が引き受けてくれそうだが，あと3千語から4千語増を求められている旨を述べている。また，書籍として出版する側のブレットも，同様に語数増を求めている。結果的には増語に応じたようで，同誌の1905年の4月号と5月号に連載された（ちなみに英国でも，the *Tatler* の1905年4月5―26日号に連載された）。そして1905年5月26日には校正刷りを受けとっており，いよいよ翌6月にはイラスト満載の贅沢な単行本としてマクミラン社より出版された。1ページ大のカラー刷りイラスト6枚を含めての182ページ，さらに本文中の随所に描きこまれた大小のイラストが何と73点，おまけに全6章の前にはそれぞれ1ページ大の単色刷り（茶色）の奇妙で何やらすこぶる暗示的なイラストまで入っている。まだある。見返しや遊び紙等にも計8枚ものイラストが配されているという，何とも贅沢この上ない作りになっている。贅沢というか，一種絵本を思わせさえする。これらのイラストはすべて，上述したこの作品の語数の少なさを補うためのものと考えられる。

ロンドン自身は，このイラストが大いに気に入ったようである。同じくブレットに宛てた1905年5月26日付の書簡に以下のように記している。

> p. s. — I have just received the proofs of *The Game*, and I want to tell you how pleased I am with the way it is being illustrated, page by page. The effect is splendid. This running illustration of the

text, in my belief gives life to the impressions of the reader. In short, I like it immensely.[9]

作品の中身が良かったのか，イラスト効果大だったのか，いずれにせよひじょうによく売れた[10]ようで，英国の場合にはさらに評判をとった[11]という。

さて，作品の舞台は，カリフォルニア州はウェスト・オークランドの労働者街。そこで働きながらボクシングをやって家計を助ける20歳のジョウが，菓子屋で店番をする18歳のジェネヴィーヴと知りあって恋に落ち，彼女の願いもあって，新婚生活を直前に最後の試合に臨むというあらすじ。しかも，女性の観戦はご法度の網の目をくぐり抜け，観戦したものの，ジョウはノックアウトされたうえに死亡してしまうという話。第1章の新婚生活に向けてのじゅうたん売り場でのやり取りや第2章の2人の馴れ初めと経緯には，純愛小説もの特有の甘さやけだるさがなくもないが，第3章の会場へ向かうところ，第4章の試合開始，第5章の試合（第1～第5ラウンド）経過，そして第6章（第6～第13ラウンド）での悲劇的結末となると，さすがに息をもつかせぬ緊迫感が漂う。特に，ジョウとポンタの戦いに人間と野獣の戦いをオーバーラップさせ，さらには静と動のコントラストまでつけて描きわけているあたりは，ロンドンならではの筆致である。また，作品全体をジェネヴィーヴの目で追っていけば，ボクシングに不案内な読者にも格好の視座が得られ，わかりやすい。逆に，ボクシング通の読者にも返って新鮮な発見があるだろう。

ところで，『試合』のめぼしい特徴をいくつか取りあげておこう。まずは，一読することによって当時のボクシング事情が手に取るようにわかる点だ。女人禁制であったため，ジョウの最後の試合を観戦することになったジェネヴィーヴには，かなりの工作が必要とされる。会場へ向かう第3章は，次のような書きだしで始まる。

> ジェネヴィーヴは，底の軽いこざっぱりしたジョウの靴をそっとはくと，ロティーと笑った。そのロティーはかがんで，ジェネヴィーヴのためにスボンを折り返してやった。（中略）
>
> ジョウは彼女の頭に帽子をのせ，オーバーの襟を立てた。すると襟は，かなり大げさではあったが，帽子にあたって，彼女の髪をすっかり隠した。襟の前の部分もボタンをかけると，その先がうまく頬を隠し，あごや口も襟の奥に隠れた。仔細に見てわかるところといえば，陰になった目と，もう少し明らかな鼻だけだった。彼女は部屋の端から端まで歩いてみたが，オーバーの垂れ具合が動きによって乱れる時に，ズボンのすそが見えるだけであった。
>
> 「風邪をひいて，それ以上こじらせたくないスポーツマンてとこだな，なかなかいいぞ」とジョウが笑いながら，自分の手細工を誇らしげに眺めやった。[12]

ずいぶんと手の込んだ工作ぶりである。現代の読者は，奇異の感すら覚えるだろう。せっかくの機会であるので，筆者所蔵の *The Game* の初版本から，上述の1ページ大のカラー刷りイラスト6枚のうちの1枚を原寸大でお目にかけたい。変装したジェネヴィーヴが更衣室ののぞき穴からのぞき見する場面のイラスト（p.95）である。多少なりとも理解の一助になり，上に引いたロンドンの満足感の一端もたしかにうかがえる。

同時に，

> 2人は，とある暗い街角にある会場にやって来た。表向きは運動競技クラブの練習所になってはいる

が，その実は，不法な試合をやってのけ，かつ警察の法令の範囲内に抑えるように設計された建物であった。ジョウは彼女から離れ，2人は別々に入り口まで歩いた。（p.36）

といったボクシング状況もあった。筆者は，「…設計された建物であった」のあとに，「当時，ボクシングは不法であったが，運動競技クラブは合法であった」と割り注を付けておいた。（こうした事情については，前稿参照。）

また，会場の様子についても，臨場感あふれる描写が目につく。

会場は大入り満員で，照明もお粗末，大きさからいうと，まるで家畜小屋のようだった。タバコの煙がもうもうと立ちこめ，何もかもが妙にゆがんで見えた。ジェネヴィーヴは，息が詰まりそうだった。少年たちがかん高い声をあげて，プログラムやソーダ水を売っており，大きなくぐもった男たちのどよめきが聞こえた。彼女は，ジョウ・フレミングに10対6で申しこむ声を聞いた。その声は一本調子だった――彼女はこの声には手出しできない響きを感じ，急にぞくぞくっとした。みんなが賭けているのは，私のジョウなんだわ。

そのほかにも感動を覚えた。この男だけの行きつけに入りこんでいくにつれ，……（p.38）〈傍点筆者〉

リングは，新案のガス・バーナーが頭上に鈴なりに取りつけてあるために，照明が行きとどいている。（p.40）〈傍点筆者〉

何とかタバコをやめさせようとする彼（＝レフェリー）の努力に，不満ののしり声やら猫の鳴き声をまねた野次やらが浴びせられた。ジェネヴィーヴは，誰もタバコを吸うのをやめないのに気がついて，憤りを覚えた。（p.41）

荒々しい時代の息づかいが，もろに伝わってくるようである。まさしく現代ボクシングの黎明期を目のあたりに見る思いがする。

次に，この作品のヒーローとヒロインのモデルについても触れておきたい。外観的にも性格的にも，いわば理想的（やや白人偏重の嫌いはあるが）なカップルには，実はモデルが存在した。J・バンクスによると，

Joe Fleming represented a young boxer he saw fight at the West Oakland Athletic Club. He modeled Joe's fiancee, Genevieve, after a candy girl he met in a London sweet shop while living there to gather material for his sociological masterpiece, *The People of the Abyss*.[13)]

といい，xvi には The West Oakland Athletic Club の外観写真まで添えてある。優れたルポルタージュ『どん底の人びと』の取材のために潜入した英国の首都の貧民窟イースト・エンドの菓子屋の女の子がジェネヴィーヴのモデルなのだという。

3点目としては，このモデルとかかわって，『試合』の評価がまっ二つに分かれている事実を取りあげたい。片や

Vernon Loggins has correctly pointed out that *The Game* (1905), London's first novel about boxing, "is probably the best novel ever written on pugilism,"[14)]

や，J・バンクスが引いた the *New York Herald* (June 10, 1905) や the *Louisville Courier Journal* (June 24, 1905) といった好評がある一方で，リアリズム――特にジョウとポンタの試合の結末――に問題ありとのクレイムもついた。ロンドンの作品に関して評価が分かれるのは決して珍しいことではないが，『試合』についても疑問が投げかけられた。その代表的なものが，the *New York Saturday Times* によるリアリティの欠如（lack of reality）の指摘である。つまり，ポンタがジョウのあごに放った1発でジョウが後ろ向きにひっくり返って，「そして，彼の頭がドサッとキャンバスに落ち」（p.66）て，後頭部全体をやられて死に至るというくだりだ。ロンドンはこのクレイムに対し，同紙の編集者に宛て自信を持って

As reviewed in The *New York Saturday Times*, fault was found with my realism. I doubt if this reviwer has had as much experience in such matters as I have. I doubt if he knows what is to be knocked out, or to knock out another man. I have had these experiences, and it was out of these experiences, plus a fairly intimate knowledge of prize-fighting in general, that I wrote *The Game*.[15)]

と応酬している。ここには，自分のそれまでの豊富な観戦歴とプロボクシングの知識に対する確たる自信が見える。この自信を支えてくれたのが，当時の世界ライト級のトップ・ランカーの1人だったジミー・ブリットの言葉であった。今引用した同じ書簡の最後に，ロンドンは次のように付け加えている。

> And — oh, one word more, I have just received a letter from Jimmy Britt, lightweight champion of the world, in which he tells me that he particularly enjoyed *The Game*, "on account of its trueness to life."[16]（筆者注——「世界ライト級チャンピオン」というのは，ロンドンの勘違い）

さらには，ロンドンの死後のことになるが，1928年に引退したヘビー級チャンピオンのジーン・タニーや，そのさらに後年の無敵のヘビー級チャンピオン，ロッキー・マルシアーノウが引退を決意するに至ったのは，共に『試合』を読んだことがその誘因となったことも忘れてはなるまい。もう1つ最後に，今日においてもなおそうした意外な結末——死——を迎えるボクシングの試合は，あとを絶たないようである。たとえば，英国のグラスゴウで行なわれたバンタム級のタイトル・マッチ後にジェイムズ・マレイ選手が死亡した件に関して，『ガーディアン』紙の記者がボクシング廃止論に賛成記事を寄せている例[18]などは，その顕著な1例であろう。

これまでエンディング——特にジョウとポンタの試合の結末部分の技術的な問題点——を中心に検討してきたが，作品そのものに則してみても決して非現実的なエンディングではないことを，今少し見ておきたい。『マーティン・イーデン』をめぐる拙稿[19]でも取りあげたが，この作品においても，たとえ「ポンタは，ゆっくりと弱っていった。観衆にとって，結果はあらかじめ決まっていたようなものであった」（p.62）にせよ，終始一貫ジョウの敗北を暗示する箇所がきわめて周到に用意されているのである。全体的には，ジェネヴィーヴの里親であるシルヴァスタイン夫人の非難と心配とがストーリーの大枠を定めている，と言ってよい。

> 「うちのおばさんは，プロボクシングがきらいなの」と彼女が言った。「偏見を持ってるんだけど，多少とも知ってはいるのよ」（p.9）〈傍点筆者〉

物語の書きだしから間もないところでのジェネヴィーヴのこの表現は，不気味としか言いようがない。「君のおばさんはぶきっちょで，あほうで，毒舌家だよ」（p.10）とそれに続くジョウの誇らしげな数行の説明は，すでに作品全体の行く末を方向づけている。また中ほどには，ジェネヴィーヴとジョウが恋人同士になった時の，「シルヴァスタイン夫人の育ての親としての感情が，あらゆるプロボクサー，とりわけジョウ・フレミングに対する痛烈な非難の言葉となって表われた」（p.29）や，夫人の「拳闘家とつきあうなんて」（p.29）が垣間見えるし，

> 「あたしゃ，何て言った，えっ？ 何て言ったかい？ 拳闘選手を決まった相手にしたいだって！ もうおまえの名前は，どの新聞にも出ちゃうよ！ プロボクシングの試合で——男の服を着てさ！ おまえったら，大した女（あま）だよ！ このあばずれ女！ この——」（p.71）

までくると，まさに大枠の締めくくりとでも言うべきものであろう。

大枠のみならず作品全体にわたって暗雲を（死をも含めて）予感させる伏線が小刻みに仕組まれていることも見逃してはならない。少し抜き書きしてみよう。

「今度が最後の機会，ほんとに最後の機会さ」（p.7）

自分（=ジェネヴィーヴ）から彼を引き離し，彼の一部を自分から奪ってしまうこの試合なるものに対し，本能的に嫌悪を感じた。（p.12）

「調子はいいって，え？ そりゃ，結構！ いやね，ただちょっとどうかなって思ってたんだ――」〈売り場の長の話〉（p.14）

「おまけに，いつでもラッキー・パンチの可能性はある，万一のことってあるからね。その可能性って結構あるんだ」〈ジョウ〉（p.36）

「あなたのほうこそ，ジョウ」と彼女が言った。「私，自分のことなんか平気。あなたのほうこそ」（p.37）

「さ，早く，最後のキスを，ジェネヴィーヴ」とジョウは，神聖なほどのささやき方をした。「僕の最後の試合なんだし，君が見てるんだから，これまでにない試合をするよ」（p.38）〈傍点筆者〉

1発でこなごなにこわれてしまいそう（p.44）

パンチが雨あられのように浴びせられ，彼女にはジョウが打ち殺されてしまいそうに思えた（p.48）

ジョウのダウン（p.54）

しばらくは助かった。……生にしがみつき，……（p.56）

彼女は，死の戦いのように思われるものの利害関係者であった――（p.58）

「もうやっつけたようなもんだが，急ぐんじゃない。俺は，やつの戦うのを見たことがある。やつは，カウントの最後までパンチを持ってるんだ。ノックアウトされて，すっかり気が変になったんだが，それでもパンチを出しつづけるのを見たことがある。ミッキー・サリヴァンが，やつをもうちょっとで倒すところだった。やつがはうようにして立つなり，マットにまた沈めたんだ，6回もだ。その時さ，すきを見せちまったのは。やつは，ミッキーのあごに手を伸ばした。2分経ったら，ミッキーは目を開けて，どうなってんだ，って訊いたってわけだ。だから，やつにゃ気をつけるんだ。今度は，踏みこんでラッキー・パンチの1つだって食っちゃいかん。俺はこの一戦でもう稼がせてもらったようなもんだが，やつがカウントアウトされるまでは，まだ安心できやしない」〈ジョウのセコンド〉（pp.62-3）

ポンタのセコンドが，水の入った瓶をキャンバスに落とす。（p.63）

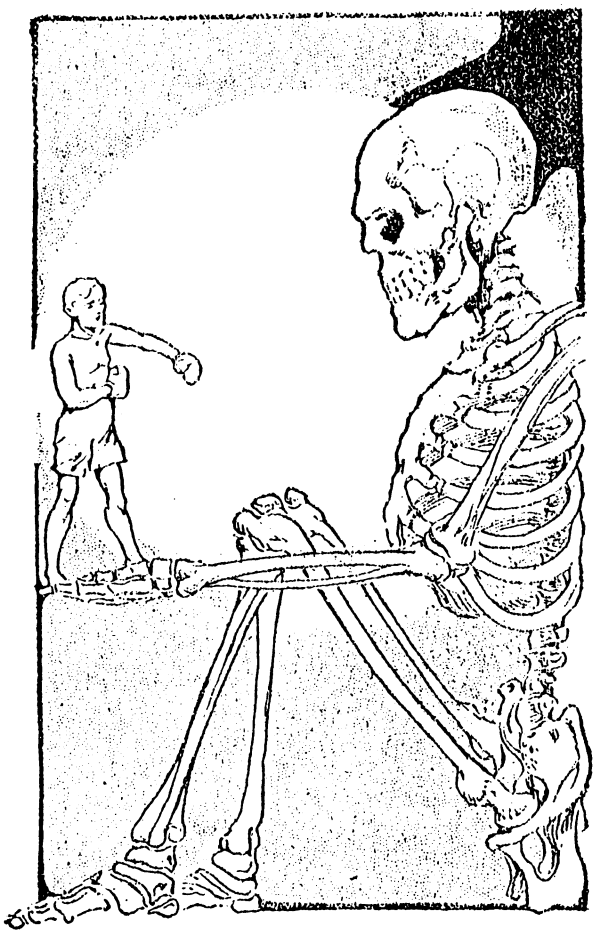
「もうラッキー・パンチ以外にノックアウトされることもねえよ。けど，そいつには気をつけるんだ」（p.64）

その一瞬，ジョウの足が濡れたキャンバスの上でスリップした。（p.66）

そして，「誰かが，死の昏睡状態のことを口にしている」（p.70）へとたどり着く。こうして拾いあげてみると，いかに敗戦と死の伏線がおびただしく用意されているかがわかる。それも，最初は何気なく，やがて徐々に，死の足音が聞こえくるように表現配置がなされているのである。

さらに付け加えれば，前述の「全6章の前にはそれぞれ1ページ大の単色刷り（茶色）の奇妙で何やらすこぶる暗示的なイラスト」にも，ジョウの死を予感させるに足るほどの具体性・象徴性が見てとれる。1枚のみ（第3章の前のイラスト）をやはり原寸大でお目にかけよう。6枚ともにこうした骸骨ないし髑髏（どくろ）絡みであり，しかも章の進行とともにそれらの占める割合が大きくなっていくわけだから，出版社の意図も明白なのである。

最後に，“game”の意味について。大きな辞書[20]にあたってみると，15種類もの定義を載せており，この作品に関連すると思われるものだけでも，「①遊び，遊戯，ゲーム ③試合，勝負 ⑥駆け引き ⑧計略，策略 ⑩冗談 ⑫標的，えじき」を拾いだすことができる。したがって『試



合』は，無論，単なるボクシングの「試合」だけでないことは言うまでもない。それは，A・シンクレアの

> Beauty and intellect and love are useless in the face of sly chance and brute necessity. All is the game of life and death, and the loser loses all.[21]〈下線筆者〉

や，C・メッセンジャーの

> *The Game* is a novel in which London elevates the "game" of boxing and its action to larger games of existence, specifically to life and death.[22]

の論評にもうかがうことができよう。『試合』も，ロンドンが他の作品，とりわけクロンダイクものの短篇群の多くで追究してみせた生と死が鎬を削るテーマに沿う作品の1つなのである。

ちなみに，この作品がロンドンのお気に入りの1つであったことも付記しておく。彼はその作家生活中に，どの作品が気に入っているかと訊かれて，その時々に違った作品名を挙げてはいるが，人生を終える1ヵ月余り前の書簡では"*The Game* is a particular pet of mine."[23]と明言している。

## Ⅲ

第2作「ひと切れのビフテキ」（"A Piece of Steak"）の舞台は，旱魃と不景気に見舞われたオーストラリアのシドニーである。主人公は，20年余りのリング生活を送ってきた（p.89）40歳（p.79）になる「古参の中では，俺が最後」（p.83）という大ベテランのボクサーであるトム・キング。昔日の栄光と面影もなくなってしまったそのトムが，「若さの権化」（p.87）であるサンデルと戦って破れ去り，痛恨の涙を流す，というのがあらすじだ。老いぼれたとはいえ，前座試合・4回戦・10回戦と3つのいわば前哨戦があって，そのあとに行なわれる20回戦のメイン・イヴェントに出場する。ここでも，時代を思わせるラウンド数の多さが目につく。（現在では，世界タイトルマッチでさえ12回戦なのだから。）それから，ボクサーの名前が実名で登場するあたりは，特に当時の読者にとっては親近感を覚えるものがあっただろう。たとえば，トミー・バーンズやジャック・ジョンスン（p.81）など今を盛りの名選手を，トムが自分のみじめな現状と対照的に思い起こしている場面がある。が，この両者は，実際に1908年12月27日にシドニーで世界ヘビー級を賭けて対戦した選手である。トム・キングの名前も実名のようだ。J・バンクスは，次のように説明している。

> London based his story on a fight he saw in New South Wales. The name of the main character, Tom King, originated with the Britisher of the same name who learned to box in the Royal Navy and reigned as Heavyweight Champion of the World in the early 1860s. London's destitute character presents a sharp contrast to the real Tom King who amassed a fortune of nearly $300 thousand before

his death in 1888.[24)]

要するにこの作品も，ロンドンがオーストラリアで観戦した試合がベースになっており，実際のトム・キングは1860年代初めに世界ヘビー級チャンピオンとして君臨した男である。面白いのは，実物のほうは大金をためこんだのに対し，この作品のトムは貧窮に甘んじる老ボクサーである点だ。

ロンドンは，この作品を1909年5月15日に書きはじめて，同年6月2日に脱稿している。（すなわち，『スナーク』号による世界一周航海が頓挫して，シドニーで入院・療養後，汽船『タイメリック』号でエクアドルに向かう途中で書きあげたものである。）これが，『サタデイ・イーヴニング・ポスト』の同年11月20日号に掲載された。その後1911年の1月に，『神が笑う時・その他』という短篇集に収められて出版されている。また，1913年には映画化もされた。

C・メッセンジャーは，この作品を“perhaps the finest boxing story in American fiction[25)]”と評し，

> he used it as an environment in which to work out the theme of biological youth dominating painfully acquired experience”

と続けている。最高の賛辞を寄せているわけだが，筆者も目につく優れた点を主に3つばかりに絞って考察してみたい。

『試合』が，物語の進行上まさかと思われたジョウ・フレミングの思わぬ敗北および死というあっけない幕切れをもって終わるのに対し，「ひと切れのビフテキ」のほうも同じく主人公の敗戦をもって物語の幕が引かれるのだが，のっけから負けの試合を予測させる材料――負けの伏線――がこれでもかこれでもかとばかりに用意されている。『試合』の書きだしが「色とりどりの模様のじゅうたんが，2人の目の前の床の上に延べられていた」（p.6）とはなやかであるのに対し，「ひと切れのビフテキ」のほうは

> トム・キングは，パンの最後のひと切れで小麦粉ソースの最後の1滴まできれいにふき取ると，ようやくひと口分になったものを，ゆっくりと瞑想にふけるようにかんだ。（p.74）

となっている。明らかに文章の調子が違う。さらに，「まぎれもない空腹感」「彼だけは食事をしたのだ」「彼の連れあいは……労働者階級の，やせてやつれた女であった」「最後に残っていた半ペニー銅貨2枚は，パンを買うのに使い果たしてしまっていた」「ぐらぐらの椅子」「粗末な服」「靴の甲皮はすっかり弱って，張りかえをした重い靴底を支えきれないほどだ」「木綿のシャツは2シリングの安物で，襟はすり切れ，……」（いずれもp.74）と，具体的に写しとられていく。J・C・オーツは，「これほど短時間の間に，これほど多くのことが，これほどとり返しのつかない形で起こるスポーツは他にない[26)]」と書いてはいるが，勝者と敗者の落差が明確（引き分けですら，挑戦者は負けと同じ）なことはなはだしいスポーツであってみれば，トム・キングの場合は冒頭から敗者の条件に満ち満ちているのではないか。上に拾いあげた書きだし部分には，その

敗者の条件の１つである生活苦がにじみ出ている。ほかにも挙げると切りがない。どの店にもツケがきかないこと（pp.77-8），時計がないこと（p.79），「がらんとした部屋」「滞納した家賃」（共にp.80）と，貧困の細部に至るまでが実に入念に，しかも淡々と描写されているのである。

敗者となるもう１つの，というよりも最悪の条件は，トムの老化である（もっとも，若さを誇っていた全盛時には，生活苦などまるで無縁であったわけだが）。上に引いた冒頭部の生活苦の具体的事例に続き，トムの容貌が克明に描きとられている。

> トム・キングの顔こそは，まぎれもなく彼の人となりを表わしていた。それは，典型的なプロボクサーの顔であった。長年四角いリングの中で過ごし，そのために，戦う獣が持つあらゆる特徴を発揮し，強調してきた者の顔であった。それは，はっきりと不機嫌な顔つきであり，その目鼻立ちがよく見えるように，きれいにひげが剃ってあった。唇は不格好で，はなはだしく荒けずりな口になっていて，まるで顔にできた割れ目のようであった。あごは攻撃的で，残忍で，頑丈であった。目は，動きが遅く，まぶたが重く垂れさがり，毛深くて長く引かれた眉の下にあって，ほとんど無表情であった。まったく動物そのものであったが，中でも目はもっとも動物らしい特徴をしていた。それは眠そうで，ライオンのような目――戦う動物の目であった。額は髪のほうへと急に後退し，その髪も短く刈ってあり，悪党らしく見える頭の瘤を１つ残らず見せていた。鼻は２度折れ，無数のパンチを受けて様々に変形しており，カリフラワーのようにくずれた耳は，永久に腫れあがって２倍の大きさにゆがんでおり，こうしたものによって，彼の装飾は申し分のないものになっていた。一方あごひげは，剃りたてだというのに，もう生えかけていて，そのために顔が青黒く見えた。（p.75）

ロンドン特有の比喩表現も豊かにちりばめられて，トムの顔が目の前に思い浮かぶようである。この直後にも，トムの体の部分（手の甲，血管，指の関節，心臓等）が柔軟性と持久力を失ってしまったことへの言及がある。この敗者の２大条件に，試合前の老ボクサーには致命的とも言える練習不足が加わり，そのうえ，会場までの２マイル（約3.2キロ）を徒歩で行かねばならないとくる。こうしたトム個人の目もあてられないほどの不利な諸条件が，さらにオーストラリアの旱魃と不景気に包まれているわけだから，まさに八方塞がりなのである。こんな状況下で，いったいトムは勝利を呼びこめるのだろうか？　Ｊ・Ｃ・オーツの言う奇跡的なことが起こり得るのだろうか？

２つめに，生の掟がこの作品――とりわけトムとサンデルの試合――を規定している点に触れておきたい。すなわち，

> ボクシング界にあっては，いつだって，こういう若者たちが浮かびあがってきては，飛びはねるようにロープの間をくぐり抜け，大声張りあげて戦いを挑むのだ。そしていつだって，老いぼれ連中が若者たちの前に屈していくのだ。（中略）決して滅びることのない若さなのだ。（p.86）

という大前提が，試合直前のところで披瀝される。それは，「老いぼれ」であるトムが若さあふれるサンデルに屈するのが目に見えていることに重なりあう。試合が始まる。なるほど，トムの定規で測ったようなペースでは進む。若い相手との一戦における読みと計算が，そこかしこに見える。たとえば，開始のゴングが鳴ると，「サンデルは，両コーナーからゆうに四分の三のとこ

ろまで出てきた。……ところがキングは，進み出る距離を短くとることで満足していた。それは彼の節約の方針にかなうことであった」（p.90）とある。さらに，

> ラウンドが終わりに近づくと，キングは，セコンド陣がいつでもロープの間から飛びこんでいけるようにと外で身をかがめているのを見てとると，試合を自分のコーナーへと持っていった。そういうわけでゴングが鳴ると，すぐに腰かけにすわったが，サンデルのほうはといえば，リングの対角線上をはるばる自分のコーナーまでもどらねばならなかった。（p.92）

若さだけからは出てこようはずもない，体力の消耗を最小限におさえようとする実に緻密な計算が働いている。だが，そうした画策も，結局は若さを前にしては歯が立たない。むしろそうしたこと自体，上述の敗者の条件につながるものであるだろう。長年のリング生活は，トムに体力の節約や「試合の駆け引きのうまさ」（p.90）や「知恵」（p.93）をもたらした反面，スタミナと持久力を奪ってしまった。一方サンデルは，若さ――「体力と持久力」（p.96）「回復力」（p.100）――にものをいわせ，度重なるダウンをも乗り越えてしまう。（おまけに，2人の目指す目標が段違いだ。サンデルの栄誉や出世に対し，トムの目的といえば貧しい家族を支えてくれる「30ポンドのため」（p.96）なのだ。）

トムは，会場へ向かう途中，20年前の全盛時代を思い起こす。「年老いたストウシャー・ビルを18ラウンドでノックアウトしたことがあったが，そのあと老ビルは，更衣室で赤ん坊みたいに泣いた」（p.82）のを。それが20年後の今となると「なぜビルが更衣室で泣いていたのかがよくわかるのだった」（p.104）で，この作品は終わる。ボクシング小説という形式で，老いと若さのぶつかりあいをこれほどきわ立って対照的に，しかも適度の哀感を含ませながら，細部に至るまで手がたく写しとった作品も珍しいのではないだろうか。

この生の掟をめぐって論ずる際，必然的に同じロンドンの短篇で，もろに弱肉強食の世界を描いた「生の掟」が想起される。老いて死のまぎわにあるコスクーシュ老人が，若かった頃を思いめぐらす場面である。また，『ジョン・バーリコーン』でも「若さというのは，いつだって老いを嘲笑するものだ[27]」と述べているが，いずれも底流は同じものだ。

3点めに，タイトルの“Steak”に関連して付言しておこう。

> ああ，あのひと切れのビフテキさえあれば，事足りたのに！ あれがなかったばっかりに決定打が出せず，負けてしまったんだ。万事あのビフテキのせいだ。（p.102）

のトムの悔恨に尽きると思われるが，体力・精力・持久力・回復力あるいは貧富の差等すべての象徴と言ってよい。この肉1枚の裏側に隠された悲哀を“universal conflict between age and youth[28]”に重ねあわせる時，読者はわが身に引き寄せながら，時代を超えてしみじみとこの作品を読み継いでいくに違いない。

トムとサンデルの戦いの描写にほとんど無駄がないこともさることながら，この作品でも比喩が駆使されており，読者の想像力に弾みをつけている。「カリフラワーのようにくずれた耳」（p.75）「眠たそうなライオンが，いきなり稲妻のように手を突きだすのに似ていた」（p.91）「脚は

鉛のようになり」（p.99）「ボンディ海岸に寄せては砕ける波のとどろきのごとき観衆の叫び声」（p.102）などは，その好例である。

最後に，「ひと切れのビフテキ」は老トム・キングが一貫して敗戦の宿命を負う物語だが，老ボクサーが必ずしも敗れ去るものではない事例を最新の試合から見ておこう。1996年7月20日に大阪府立体育会館で行なわれたWBCジュニアフェザー級タイトルマッチ12回戦[29]で，チャンピオンで38歳のダニエル・サラゴサ（メキシコ）が，若い挑戦者の原田剛志を7回TKO勝ちしたのである。王者の利点――十分な練習や食事――といった点で，トム・キングとは比較にはなるまいが，年齢・キャリア・技術面，特に年齢を考える時，老いを深刻に受けとめねばならないベテラン選手にとって，サラゴサの勝利と防衛は1つの朗報には違いない。

## Ⅳ

3つめのボクシング小説は「メキシコ人」（"The Mexican"）である。1911年8月19日に『サタデイ・イーヴニング・ポスト』に掲載され，その後1913年2月にセンチュリー社より出版された短篇集『夜に生まれたもの』に収められた。他の3作とはかなり異質のユニークな作品である。単なるボクシング小説として片づけられない歴史的・政治的・社会的な背景が，厳しく立ちはだかり，ひと筋縄ではいかないのである。

構成は全4章と少ないが，第1章の書きだしの1節は以下の通りである。

> 彼の経歴は，誰にもわからなかった――彼ら秘密結社の者には，とりわけわからなかった。彼は秘密結社の「ちょっとした謎」であり，「偉大な愛国者」であった。そして彼なりに，みんなと同じように，来たるべきメキシコ革命のために奮闘していた。みんなは，このことを認めるのを渋っていた。秘密結社の誰1人として，彼を気に入ってはいなかったからだ。彼がはじめて彼らの窮屈であわただしい部屋に流されるように入ってきた日，一同は彼のことをスパイ――ディーアス秘密警察に買収された手先の1人ではないか，とにらんだ。あまりにも多くの仲間が，合衆国中に散在する民間および軍の刑務所に収容され，中には足かせをはめられて，国境の向こうに連れ去られ，日干しレンガの壁を背に並ばされて銃殺される者もいたからである。（p.106）

一読したかぎりでは，普通の読者なら戸惑いを覚えるだろう。メキシコ革命に向かう秘密結社やらディーアス秘密警察やら，特に現代の読者にはなじみのない言葉が次々に登場するからである。第1・2章はこうした革命のにおいと緊迫感が漂う秘密結社が舞台となり，そこへフェリーペイ・リヴェラという18歳の少年が「革命のために働ければ本望だ」（p.106）と言ってやって来る。結社は，革命に向かう困難――とりわけ資金不足――のため，時節到来にもかかわらず絶望状態にある。みんなから猜疑心を持たれながらも，この少年は結社の滞納家賃や切手代などを必ずどこかで調達してくる。そして，いよいよ「ここ何年かの，見るも痛ましい，謀議やら地下工作やらの苦労が実る時が近づいた」（p.115）のに，銃と弾薬を手に入れる金がない。そこでリヴェラは，「3週間したら，僕がその5,000ドルを持ってきましょう」（p.117）と言って，忽然と姿を消す。第3章に入ると，舞台は急にロサンゼルスのボクシング事務所に変わる。ここで革命とボク

シングとが結びつくわけである。第1・2章におけるさまざまな金の工面も，実はリヴェラがボクシングをやって稼いできたものなのだ。今回は，ダニー・ウォードという「一流の戦略的なボクサー」（p.120）とやる，それも分けまえについては「勝ったほうが，全部取る」（p.126）という前例のない契約をダニー側に結ばせる。両者の戦う目的は同じ金のためだが，その使途の違いを理解しながら読むと興味深い。最後の第4章がダニーとの試合で，大変な苦戦ののちに勝ちをものにする，というエンディングである。読者の側の最初の戸惑いも，第3章以降で薄皮を剝ぐように徐々に解消されていくあたりに，この作品の醍醐味があると言えよう。

政治的・歴史的背景にも言及しておく必要がある。まずはディーアスである。手もとの人名辞典によると，

> Porfirio 1830-1915 メキシコの軍人・政治家。改革戦争（1880～84）と反フランス闘争（'58～60）ではフアレスのもとで働いたが，'71反旗を翻し，失敗。'76再び反乱を起こし，レルド-デ-テハーダ政権打倒に成功，大統領に就任。以後'80～84を除き，1911まで独裁者としてメキシコに君臨。その間，フアレス政権時代に接収された大所有地の地主への返還，教会権力の強化，インディオ共有地（エヒド）の大地主による奪取など，教会・地主勢力の拡大をはかる一方，アメリカ資本の大量導入により国家資源の開発を行なった。しかし'10反独裁革命がおこり，翌'11革命軍のメキシコ-シティー入城を前に辞任パリへ亡命し，同地で没。[30]

とある。今日においてさえ，メキシコ大統領は「ラテンアメリカ諸国の中でもその強大な権力を掌握していることに定評がある[31]」というのだから，ましてディーアスの長期にわたる独裁政権下にあっては推して知るべしであろう。いかにその時代が物質的繁栄を誇ったにせよ，それはごく一部の富める者たちのためであって，大多数の民衆は労ばかり多く報われることがなかった。となれば，歴史がくり返す通り，一揆や革命の狼煙（のろし）が上がっていく。

> Francisco Madero issued a call for the overthrow of Diaz in November 1910, and violent revolutionary fires again swept Mexico.[32]

と火の手が上がり，メキシコ革命は延々と続いていく。したがって，「メキシコ人」はこの時期の直前あたりが背景になっているものと考えられる。J・バンクスも述べている通り[33]，つねに抑圧された人々のことを案じていたロンドンは，革命の大義に寄与するものとしてこの作品を書いたのである。しかも，ボクシングという彼の得意な分野を巧みに活用することによって。

ちなみに，このユニークな作品は日本でも脚本化されたようで，『文芸戦線』の1927（昭和2）年1月号に「メキシコ人（5場）」として掲載されている。脚色は，前田河廣一郎である。原作にはない「第5場」が，最後に書き加えられている。リヴェラが同志のところへもどって来て，金の包みを渡す。ト書は，次のように締めくくられている。

> フェリプ・リベエラ卒倒して人々の腕に倒れる。
> ラモス急いで新聞包を解き，一同へ夥しき紙幣束を
> 示す。阿呆のやうな表情。

ヴエラ卓上に感きはまつて泣く。

ドラマティックにすぎるこの5場が必要なものなのかどうかの評価はともかく，また，時代（今から70年も昔）を感じさせる漢字や旧かなづかいを勘案しても，なおこの脚本は原作の味をよく伝える佳品であると評価したい。

さて，「メキシコ人」についてもいくつか目につく点を指摘しておこう。まず何と言っても最大の特徴としては，すでに若干触れたように，革命とボクシングの取りあわせがきわめてユニークな点であろう。しかも，この取りあわせと関連して，さまざまな二面性が内包されているのである。大枠で見ると，第1・2章（革命の舞台裏）と第3・4章（ボクシングの試合）とが表裏一体をなす構成はみごとである。個人的に見れば，リヴェラの二面性――革命軍の一員であり，プロボクサー――にも着目しなければならない。彼のとる行動の1つ1つが，2枚の布切れ（革命とボクシング）を縫いあわせていく糸のような働きをしているし，第3章のロバーツの話が第1・2章におけるリヴェラの出没を鮮やかに裏打ちしていくというわけだ。またほかにも，ダニーの二面性――表向きは愛想のよいスポーツマンでありながら，実は「血も涙もないボクサー」（p.124）――もある。

構成上忘れてはならないのは，第4章の試合の場面にいくつかの幻影が折りこまれている点である。それもかなりのスペースを割いている。長くなるが，1つ引いてみよう。

> だが，リヴェラの追憶の眼前には，さらにいろいろな光景が燃え立った。ストライキ，というよりはむしろ工場閉鎖だ。これが起こったのは，リオ・ブランコの労働者たちが，ストライキをやっているプウェイブラーの同胞を支援したためだ。飢えのあまり，木の実や根や草の葉を求めて丘陵地帯への遠征隊を送るのだが，みんなはそうしたものを食べたがために，胃をねじるほど痛めたのだった。それから悪夢，会社の店の前の荒地，何千人もの飢えた労働者，ロサーリオ・マーティネイス将軍とポーフィーリオ・ディーアスの兵士たち，決してやむことがないように見える，死を吐きだすライフル銃。かと思えば，労働者たちの不当な行為が，自らの血で再三にわたって洗われていた。そして，あの夜！ 彼は平台型貨車を見た。そこには，ヴェラ・クルーズに送られて，湾の鮫のえさとなる殺害された者たちの死体が，山積みされていたのだ。再び彼がそのぞっとする死体の山の上をはい，捜して見つけたのが，裸にされ，めった切りにされた自分の父親と母親であった。母親のことを特に思いだした――彼女の顔だけが突きでて，体のほうは何十もの死体の重みがのしかかっていた。再び，ポーフィーリオ・ディーアスの兵士のライフル銃が鋭い爆音を発すると，また彼は地面にうずくまり，丘の狩り立てられたコヨーテのようにこそこそと逃げたのだった。（pp.133-4）

恐ろしい光景である。と同時に，こうした光景が，リヴェラの革命に賭ける思いを――ひいては，ダニー・ウォードとの一戦に何としても勝たねばならないとの執念――を支えているのだ。これらの幻影の折りこみは，「メキシコ人」を単なるボクシング小説に終わらせずに重厚な仕上がりを持つことに貢献しており，革命が伸るか反るかの厳しい迫力を添える働きをしている。その意味で，幻影の持つ意義は計り知れないほど大きい。

2つめには，プロボクシングの内幕あばきを自然に写しとることに成功している点が挙げられる。プロモーターのマイケル・ケリーの言葉

「ダニーが勝たなきゃいかんのだ――俺はどうも大金を失いそうだ。しこたま金を賭けてんだ――自分の金をだ。やつが15ラウンドまで持ったら，俺は破産だ。あの子は君の言うことをきくだろ。何とか承知さしてくれ」（p.146）

や，

「どうせおまえは負けるんだ」と，スパイダー・ハガティが補った。「レフェリーは，おまえの負けにするぜ。ケリーの言うことをきいて，負けてやれ」（p.147）

などは，その最たるものであろう。ロンドンがこうした面で果たした功績も，無視することはできない。（これについては，次のVでも扱う。）

3点めは，racismの問題が絡んでいることである。まず，具体的な事例を引いてみよう。第1・2章の場合は同じメキシコ革命軍の同志だから問題は発生しないが，第3・4章に入ると，盛んにメキシコ人を蔑む表現が飛び交う。

①「……ところで，この小さな黄色いやつは，きょうずうずうしくも舞いこんできやがって，カーシーの代わりをやろうって言うんだ。……」（p.121）
②「……この小さな飢えたメキシコの若僧が……」（p.121）
③「何だと，このこぎたない，ちびの，メキシコ人野郎めが！ 今すぐにでも，おまえみたいなうすのろをやっちまいたいぜ」（p.127）
④「このちびのメキシコねずみ野郎めが」（p.135）
⑤「いさぎよく戦え，この野良犬めが！」（p.149）

①はケリー（プロモーター），②はロバーツ（コンディショナー），③と④はダニー，⑤は観衆から，それぞれ発せられる言葉である。リヴェラは，いわば，ボクシングの試合に関係する者全体を敵にまわして戦うわけである。このありさまは，前稿[34]で取りあげた1908年12月26日の白人バーンズ対黒人ジョンスン戦や，1910年7月4日の白人ジェフリーズ対黒人ジョンスン戦とも重なりあう。白人種対黒人種の対決構図が，ここでは白人種（ダニー）対褐色のメキシコ人（リヴェラ）の形で提示されているのである。

"Mexican" ... which has since been used by some Anglo-Saxon Americans as a derogatory label for the Spanish-speaking in the United States,[35]

今日でさえこうした構図を拭いきれずに引きずっているわけだから，上に引いた表現などは当時の社会状況をよく反映しているものと言えよう。ロンドンの視点は無論，E・レイバーが指摘する通り，

..... the deeper theme is the important thing : no amount of prejudice and corrupt power can overcome the universal human desire for freedom, regardless of race or color or nationality.[36]

であろう。いかなる偏見も腐敗勢力も，人種・皮膚の色・国籍に関係なく人類が共通して求める自由というものを踏みにじることなどできない，というわけだ。

最後に，本章でも豊かな比喩表現に触れておこう。この作品では，試合中に限らず，第1章の初めから「得体の知れないやつ」（p.107）として登場するリヴェラを形容する形で現われる。

> 少年の黒い目には，悪意に満ちた蛇のようなものがある。その目は冷たい火のように燃えていて，まるで激しい痛恨の念がこもっているようであった。（p.107）

> 顔から顔へ，発言者から発言者へと，その目は移っていっては，きらめく氷の錐のように穴を開け，人の心をどぎまぎさせ，かき乱すのだった。（p.111）

> 「……野生の虎の目みたいに残忍だよ。（中略）はがねのように薄情で，霜のようにきびしく冷たい。冬の夜に，どっかの人里離れた山の頂上で人間が凍死する時の月光みたいだ。僕はディーアスややつの殺し屋なんかこわくないが，この少年は何とも恐ろしいよ。いや，まったく。恐ろしい。彼は死の息吹きさ」（p.111）

> 「……原始人であり，野生の狼であり，息をのむばかりのガラガラ蛇であり，針を持つムカデだ」（p.113）

> 「あいつは，悪魔の化身だな」と，ヴェイラが言った。「革命の炎であり精神だ。叫び声をあげず音も立てずに人を殺してしまう復讐の，飽くことを知らぬ叫びだ。夜のしじまの監視の中を動きまわる，破壊の天使だ」（p.113）

凄まじいまでの喩え方である。リヴェラの怨念がひしひしと伝わってくる。同志ですらこういう喩えを使うのだから，上述の幻影（ほかにまだ3つある）と重ねる時，読者はすべてを失ったリヴェラの悔しさとそれをバネにした革命への執念の深さを思い知らされる。試合中の比喩については割愛するが，さほど多くはないにしても，試合の流れや雰囲気を引き立てる表現が適度に配置されていることだけは指摘しておきたい。

## V

4つめの『奈落の獣』（*The Abysmal Brute*）は，いかにもアメリカ人好みのする作品である。全10章から成り，元ヘビー級のボクサーでベテラン・マネージャーのサム・スチューブナーが1通の手紙を受けとるところから物語は始まる。パット・グレンドンという昔のボクサーからのもので，自分の育てた息子のヤング・パット・グレンドンを見に来てもらいたいとの要請である。サムは北カリフォルニアの山中へと出向き，その「根っからの自然児」（p.162）と対面，「天性の戦士」（p.169）ぶりを見てとり，サンフランシスコへと連れていく。あとは，ラフハウス・ケリーとの一戦を皮切りに，名声の階段を駆けあがっていく。第6章では，モード・サングスターという女性記者との劇的な出会いがあり，ヤング・パットはひと目惚れする。彼女は，八百長試合

のことを話題にする。ナット・パワーズとの一戦で16ラウンドKOという仕組まれた勝ち試合のことを知らされたパットは，18ラウンドでノックアウトしてみせるとモードに約束するが，16ラウンドにパワーズがわざと敗れる。パットは，モードのオフィスへ中身の説明と理解を求めに出かけ，プロポーズをして，北カリフォルニアへハネムーンに出かけ，トム・キャナムとの一戦での一大計画を練る。そして第10章は，パットの最終試合で，観衆を前にボクシング界の不正をあばいていく。「世界チャンピオンの偉大なるジム・ハンフォード」（p.256）までが激怒して飛びだし，殴りかかっていくが，これをも「たったの1発で沈めてしま」（p.256）う。あとは，トム・キャナムをノックアウトし，騒然とした会場を引きあげていくというエンディングである。無敵の主人公が見せるボクシングの醍醐味という点では，他の3作の追随を許さず，痛快ですらある。別の言い方をすれば，「スケールの大きな，力強い，スリル満点のプロボクシング小説」[37]なのである。

『奈落の獣』は，実はあのシンクレア・ルイスと関連の深い作品である。ロンドンが1906年に講演のためイェール大学を訪ねた際にルイスと会い，

> The two became friends, and in 1909 they were members of a bohemian colony known as 'The Group' which lived in rather primitive style at Carmel on the coast of California. When, a year or later, Jack London began to run short of plots for his stories, Sinclair Lewis offered to sell him some, which he set out briefly in half-a-dozen lines. Among them was one with the not very attractive title of *The Dress Suit Pugilist*: London accepted this, and in his hands it became *The Abysmal Brute*.[38]

という経緯があったのである。プロット不足に陥っていたロンドンと，まだ駆けだしで芽が出ず当座凌ぎの欲しかったルイスとの間に，取り引きが成立したというわけだ。もう少し詳細な数字を示すと，ルイスから55のプロットが提示され，ロンドンはそのうちの27のプロットを総額137ドル50セントで買いとったが[39]，実際に利用されたプロットは5つだけであった[40]。この作品はその5つのうちの1つで，1910年10月4日に7ドル50セントで購入された。同年11月25日には，もうこの作品に取りかかっており，翌1911年1月26日には262ドル84セントの原稿料を得ている。同年9月1日には『ポピュラー・マガジン』（Vol. 21）に，1912年1月15日には英国の『レッド・マガジン』にも掲載された。そして1913年5月にセンチュリー社より出版されると，即座にヒットしたという。

『奈落の獣』にも注目すべき点がいくつかある。まずは，アメリカン・ドリームをもののみごとに体現した作品である点だ。アメリカン・ヒーローの系譜には，実在・伝説を問わずさまざまな人物が登場し，アメリカ人の心を捕らえて離さない者が数多くいるが，この作品の主人公ヤング・パット・グレンドンもそれらのヒーローたちに負けずとも劣らぬスーパースターである。何しろ，

> 立派な体格，ハンサムな顔，貞節な唇，曇りのない目，短く刈った金髪のために隠れていないすばらしい額，彼が発していると思われる肉体上の健康と清潔さ（p.208）

といった容貌に加え，「220ポンドの体重」（p.167）の大男ながら「歩き方が軽快で猫のよう」（p.167）で，おまけに詩や絵画に興味を持つインテリでもある。アメリカ人が拍手喝采を送りたくなる，スーパーマンとも言える存在なのだ。しかも，

> *The Abysmal Brute* forecast Gene Tunney's winning of the heavyweight championship in 1926. Tunney, like Pat Glendon was an honest, intellectual man who retired from the ring with his integrity still intact.[41]

の通り，実際にこの主人公のような人物が近い将来に登場することの予見にまでなっているというのである。ジーン・タニーの出現により，ヤング・パット・グレンドンはまったく現実離れのした信じがたい存在なのでは決してないことが証明されたというわけだ。

2つめは，この作品も，いや，この作品こそ，正面切ってボクシング界の不正浄化を狙って書かれた点である。痛快なボクシング小説というよりもむしろ，この作品全体がそうした狙いに貫かれていると言ったほうがよいかも知れない。第2章で早くもオールド・パットがサムに対して言い放つ次の言葉が，作品全体の枠組みを決定づけていると言っても過言ではない。

> 「わしがあんたに何度も言ってきたことを忘れんでくれ。せがれは汚れがなく，正直だ。試合のきたないところなど何も知らない。そういうことは，まるであいつから遠ざけていたいんだ，ほんとは。あいつは，いかさまの意味も知らんのだ。知ってることといえば，戦いの勇ましさと魅力と栄光だけだ。わしは，昔のリングの英雄たちの話をいっぱい聞かせてきた。（中略）あいつは，人間がわざと負ける，つまり八百長で負けるなんて知らんのだ。だから，あいつを公正じゃないことにはかかわらさんでくれ。せがれをあんまり不愉快にさせんでくれ。そんなわけで，無効という文句をさしはさんだんだ。もし違法なことをやれば，契約は自動的に破棄される。契約書には，ちょっとでもいい加減なところがあっちゃいかん。一定のラウンドを保障するための映画人との秘密協定もいかん。あんたら2人に金はたっぷりある。だが，正々堂々とやるんだ。でないと，損をするぞ。いいか？」（pp.173-4）

これこそは，作品の最後までをも見通した発言である。以下，ヘンダースンとの試合直前にパットが話を持ちかけられたり（p.193），モードの

> 「……私は男の人たちが時々，特定の試合や賭け越しのことを話しているのを聞いたことがあります。その時には気にもとめなかったのですけれど，どうやらこのスポーツと絡んでずいぶんとペテンやごまかしがあること」（p.208）

の疑い，続いて雑誌の編集者が

> 「……悪くない勝ち方をするつもりだ，って言ってました。勝てればいいとは言わずに，勝つつもりだ，って言いました。自分は有利な立場を占めていて，ラウンドの数に賭けている，って言いました。試合は19ラウンドで終わるだろう，って言ってました。試合の前夜にですよ。……」（p.209）

といった彼女の証言，それ以降のサムの抗弁，モードの「昨夜，同じ編集者から聞いたのですけ

ど，あなたの今度の試合は，終わるラウンドそのものまで手はずがついているんですって」（p.211）といった執拗な追及など，第6章の後半（pp.208-221）のパットとモード，モードとサム，パットとサムのやりとりは，ある意味ではパットの試合ぶりよりも息詰まるような迫力ある筋の運びで，ボクシング界の腐敗を正したいと願っていたロンドンの情熱がひしひしと伝わってくる場面である。そして，あらすじで見た大詰めへと一気に展開を見せるのである。読者は，

> ..... the soul of prizefighting, with all its gallantry and sordidness, its heroic points and drab grossness has been laid bare.[42)]

との読後感を得る。すなわち，ボクシングの醍醐味を堪能し，その世界の浄化に溜飲のさがる思いが得られ，一挙両得というわけである。

3つめは，『試合』の場合と同様，時代を感じさせるというか，時代を写している点である。第7章の第2節めと第3節めの初めの，

> 試合当日の夜，モード・サングスターは，それまでにない大胆で因襲にとらわれない言行をしでかした。とはいっても，そのことが洩れて社会に衝撃を与えるまでには至らなかったが。編集者の引き立てによって，彼女はリング・サイドの席を占めた。髪と額の大部分は縁の垂れたソフト帽に隠れていたし，踵まで垂れさがった男物の長いオーバーを着ていた。人ごみにまぎれて入っていったので，気づかれることもなかった。彼女のすぐ前の，リングの近くの記者席にいる新聞記者たちにもわからなかった。
>
> だんだんとそういう習わしになってきていたのだが，前座試合は1つもなくて，彼女が席に着くか着かないうちに，どっと拍手喝采が起こり，ナット・パワーズの登場してくるのがわかった。（pp.221-2）

引用の中ほどあたりがそうなのだが，ジェネヴィーヴの変装と一致する。それともう1つは，45ラウンド・マッチで，あの「クィーンズベリー・ルール」に従って行なうとの宣言（p.258）を挙げることができよう。

4点めは，*The Abysmal Brute* というタイトルの由来である。ロンドンがルイスから買ったプロットのタイトルは，上にも引いた通り *The* Dress Suit Pugilist（『礼服を着た拳闘家』）であった。作品の中では，グレンドンが

> 顔を合わす者とはほとんど口をきかないものだから，むっつりだとか無愛想だとか言われた。このことから，新聞評で具体的になったのは，それが誇張ではなくてむしろまったくの思い違いだということであった。要約すると，印刷された彼の性格というのは，雄牛の筋肉をした，だんまり屋で愚かな獣の性格ということであった。そして，ある青二才のスポーツ記者が彼のことを「奈落の獣」と呼び，この名前が定着してしまった。他の同業者仲間たちは，この呼び名を歓呼の声で迎え，それからは，グレンドンの名前が活字で出る時には必ずこの呼び名がついてまわった。たびたび，見出しや写真の下に，大文字で引用符をつけずに，「奈落の獣」とだけ出た。世間ではみな，この獣の正体を知っていた。このため，彼はいよいよ引っこみがちになり，新聞人に対して苦々しい偏見を持つようになった。（p.195）

と記している。（最後の「新聞人に対して苦々しい偏見」などは，当時のジャーナリズムに対するロンドンの不満をほのめかしたもので，むしろ3点めで取りあげるべきものかも知れない。）

また，このほかにもいくつか（p.199，p.203，pp.204-5）命名の由来が述べられている。なるほど，「雄牛の筋肉をした」「腕力のものすごさ」（p.199）「巨体をした」（p.203）等は獣の属性でもあるのだから，呼称として百パーセント当たっていないというわけでは無論ないが，およそかけ離れたものであるようにも思われる。現にロンドンは，ブリット対ネルスン戦（1905年9月10日）の記事を書いた際に，ネルスンのことを「奈落の獣」と呼び，ネルスンの激昂を買った。その時ロンドンは，

> 「……僕は，賛辞として彼をあんなふうに呼んだのだ。彼の度胸と性質と気迫には，先へ進んでいく原始的なもの，とどまることを知らぬ――原始的なものがある[43]」

と釈明して，ネルスンの誤解を解いた。とは言っても，どうも釈然とはしない。「奈落の獣」のイメージは，むしろパットの戦う相手ナット・パワーズの容姿にはるかにふさわしいのではないかと思われる。

> 彼女（=モード）は，その恐ろしい巨体に一種の恐怖を覚えた。それでいてパワーズは，その体重の半分ぐらいの人間と同じぐらい敏捷にロープを飛び越え，観客全体から沸き起こるにぎやかな歓呼の声に応えて，にやにやと笑うのだった。とても美男子とは言えなかった。カリフラワーのようにつぶれた両耳を見れば，その職業とそれに付き物の残酷さがわかったし，かと思えば，その砕けた鼻は，これまでさんざんに打たれたあまり，外科医の腕をもってしても元通りにはできないほどであった。（p.222）

事実モードは，「この2人のまったく対照的な男を見て，グレンドンには毛並みの良さを，パワーズのほうに奈落の獣を見る思いがした」（p.222）と見ている。筆者は，このパワーズを含めた賭博をやるプロボクシング関係者全体を象徴しているのがこの呼称ではないかと考える。仮にパットに引き寄せて解釈するとしても，せいぜいパットの無垢や潔癖さ，気立てがよく温厚（p.174），天真爛漫（p.193），素直（p.219）等々をきわ立たせる反語的なネイミングであるとの解釈のほうが自然であろう。（もう1つの解釈として，モードが語る「私のいとしの奈落の獣が，ものすごく底の知れないむちゃくちゃなふるまいをしようってわけね」（p.242）があるが，物語の最終段階に至っての形容としては，理解はできるが，ややこじつけの気味があろう。）

5点めに，wilderness に触れておきたい。パットがスチューブナーに見いだされるところは，北カリフォルニアの山奥（大自然のまっただ中）であり，なるほど一時的に都会（文明世界）へ出てはきても，やがて八百長をあばいてみせたあとは，またモードと大自然に帰っていく。途中，ハネムーンでも同じ北カリフォルニアを選んでいる。第9章では，そうした雄大な大自然の懐に抱かれたパットとモードの姿が描かれている。『野性の呼び声』や『白牙』の舞台となった極北の地と共通した大自然――温度差の違いはあっても，都会からはるかに離れたところである点では共通――である。「人間の歴史や能力に比べて，大自然は永遠それ自体である[44]」ことを，さまざまな体験で思い知らされていたロンドンの作品にさまざまな形で大自然が描きこまれるのはきわめて自然なことだが，4つのボクシング小説中こうした大自然そのものが描きこまれているのは，この作品だけである。J・バンクスも，

Pat Glendon, the story's young hero, symbolized London's preference for the cleanliness and virtue of the country as opposed to the grime and evil of the city.[45]

と書いている。

最後に，『奈落の獣』もロンドンお気に入りの作品であった。1914年にサクラメントで行なわれたステイト・フェアでの記者の質問に，『奈落の獣』が一番気に入っている，と答えた[46]という。

## Ⅵ

本稿では，ロンドンのボクシング小説4篇を個々に考察してきた。概して言えば，"London used American popular sport to create dramatic characters and swift, violent action."[47] に尽きるだろう。つまり，「ボクシングというポピュラー・スポーツを利用して，ドラマティックな登場人物と敏捷かつ荒々しい行為とを創造した」というわけだ。数ある自作の中でも好きな作品は？と問われて，『どん底の人びと』や『マーティン・イーデン』とともに『試合』や『奈落の獣』などが口を衝いて出てきたほどだから，よほどの愛着があったのだろう。

たしかに4篇の出版年だけを見ると，さして目立った特徴はないが，それぞれに先立って雑誌掲載が行なわれ，そのまた前の執筆年月までさかのぼると，相当な時間を割いたことになる。さらには観戦記事の発表分まで視野に入れると，これはもう目立った特徴などないとは言えまい。改めてこれらすべての発表年月を並べ立てることはしないが，その作家活動期間中ほぼ満遍なくボクシングに関係する記事ないし作品を発表しつづけていたことがわかる。（実際に観戦した時間そのものまで含めると，大変な労力の割きようである。）単に個人的な関心事にとどまらずに，つねに執筆活動の対象でありつづけたのだ。その意味では，「ジャックは優秀なボクサーであるとともに，さらに優れた観戦記者であったばかりか，拳闘試合場を小説に利用した開拓者でもあった[48]」ということになる。

女人禁制やラウンド数の多さといった時代性，ボクシング界の内幕あばき，豊富な比喩表現といった共通項は見つかるものの，4篇はそれぞれに味わいの異なるユニークなボクシング小説である。すでに90年も昔に書かれた作品にもかかわらず，現代日本の書評子にもなお「どれも単なるメロドラマに終らない，不思議な魅力を持っている[49]」と書かせるものは，いったい何なのだろう。自らもグローブを着けてボクシングのまね事に興じ，数多くの試合を観戦し，またその記事をも書くことでロンドンは，「生の掟」を肌で感じとっていたに違いない。そうした観戦経験と記事の執筆とが，4つの作品を生む土壌となり，それらの正確でリアルな仕上りに大きく寄与したのだと言えよう。どの作品も，揺るぎのない自信と凜とした風格すら漂わせており，ボクシング小説のパイオニアにふさわしい手法と内容を備えている。

### 注

1） J・ロンドン著・関弘訳『海の狼』（トパーズプレス，1996）

2） 拙稿「ボクシングとJ・ロンドン」（『立命館経済学』第44巻第4・5号，1995）参照。

3）筆者が1992-3年留学の際，カリフォルニア州サンマリーノウのハンティントン図書館で読んだ Frank I. Atherton の手になる原稿（pp.576-7）より。

4）*The Game and The Abysmal Brute*, edited and introduced by I. O. Evans (London : Arco Publications, 1967), p. 8.

5）Christian Messenger, "Jack London and Boxing in *The Game*" (*Jack London Newsletter*, Vol. 9, No. 2, 1976), p. 67 には，"The first major modern American author to use American popular sport in his fiction was Jack London." とある。

6）Russ Kingman, *Jack London : A Definitive Chronology* (California : David Rejl, 1992), p. 52. 以下，日付については，特に明示しない場合は本書に負うところ大である。

7）*The Letters of Jack London*, Vol. One, edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard (Stanford University Press, 1988), p. 452.

8）*Ibid.*, p. 456.

9）*Ibid.*, p. 484.

10）*The Game and The Abysmal Brute*, p. 13.

11）Robert Barltrop, *Jack London — the Man, the Writer, the Rebel* (London : Pluto Press, 1976), p. 108. 彼によれば，本国では "It did not sell well, apparently on account of its subject-matter ;" という。

12）*The Game and The Abysmal Brute*, pp. 37-8. 邦訳は，拙訳書『試合』（社会思想社・現代教養文庫，1987），pp. 33-5. 以下，本訳書からの引用はすべて，引用文のあとにページ数をもって示すこととする。

13）James Bankes, *Jack London : Stories of Boxing* (Iowa : Wm. C. Brown Publishers, 1992), p. 3.

14）James Glennon Cooper, "The Womb of Time : Archetypal Patterns in the Novels of Jack London" (*Jack London Newsletter*, Vol. 8, No. 1, 1975), p. 3.

15）*The Letters of Jack London*, Vol. One, p. 512.

16）*Ibid.*, p. 513.

17）Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York : Crown Publishers, 1979), p. 225.

18）The *Guardian Weekly*, Vol. 153, No. 17 (October 22, 1995), p. 32.

19）拙稿「J. London, *Martin Eden* をめぐる諸問題——その結末とマーティンの死——」（『立命館言語文化研究』第2巻第1号，1990年9月）

20）『小学館ランダムハウス英和大辞典』（小学館，1994），p. 1089.

21）Andrew Sinclair, *A Biography of Jack London* (London : Weidenfeld & Nicolson, 1978), p. 110.

22）Christian Messenger, *op. cit.*, p. 68.

23）*The Letters of Jack London*, Vol. Three, p. 1590.

24）James Bankes, *op. cit.*, p. 98.

25）Christian Messenger, *op. cit.*, p. 68.

26）Joyce Carol Oats, *On Boxing* (Dolphin/Doubleday, 1987) 邦訳は，北代美和子訳『オン・ボクシング』（中央公論社，1988），p. 20.

27）Jack London, *John Barleycorn* (Santa Cruz : Western Tanager Press, 1981), p. 149. 邦訳は，拙訳書『ジョン・バーリコーン』（社会思想社・現代教養文庫，1986），p. 126.

28）James Bankes, *op. cit.*, p. 98.

29）京都新聞，1996年7月21日，p. 22.

30）『コンサイス人名辞典——外国編——』（三省堂，1979），p. 519.

31）京都新聞，1988年8月9日，p. 4.

32）James Bankes, *op. cit.*, p. 116.

33）*Ibid.*, p. 116.

34）上記拙稿「ボクシングとJ・ロンドン」，pp. 189-191.

35） Joe S. Bain, III, "Interchapter : Jack London's "The Mexican" (*Jack London Newsletter*, Vol. 15, No. 3, 1982), p. 115.

36） *Sporting Blood : Selectinos from Jack London's Greatest Sports Writings*, reviewed by Earle Lobor (*Jack London Newsletter*, Vol. 15, No. 2, 1982), p. 102.

37） Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London*, p. 244. 邦訳は，拙訳書，p. 442.

38） *The Game and The Abysmal Brute*, p. 67.

39） Russ Kingman, *op. cit.*, p. 160.

40） Robert Barltrop, *op. cit.*, p. 137.

41） James Bankes, *op. cit.*, p. 40.

42） *Ibid.*, p. 39.

43） Russ Kingman, *op. cit.*, p. 226. 邦訳は，上掲拙訳書，p. 408.

44） 中田幸子『ジャック・ロンドンとその周辺』（北星堂，1981），p. 337.

45） James Bankes, *op. cit.*, p. 38.

46） Russ Kingman, *op. cit.*, p. 244.

47） Christian Messenger, *op. cit.*, p. 71.

48） Russ Kingman, *op. cit.*, p. 225. 邦訳は，上掲拙訳書，p. 406.

49） 『月刊オーパス』（創現社出版，1991年8月号），p. 87.

（1996. 9. 1.）

付記：Ⅱで取りあげた『試合』の原書が何とも贅沢な作りになっていることについて書いたが，この拙稿を清書した直後に，『図書』8月号（岩波書店，1996年）の「〔座談会〕本の虫」を読んだ。そこで改めて『試合』の初版本を手に取ってみると，本の上の切り口（天（あたま）という）に金箔が施されているのに気づいた。座談会の中で，高宮利行氏が次のような興味ある発言をされているので，参考までに引用しておきたい。「三方金といって本の上，下，横の切り口に金箔を施すことがありますね。そうすると，ページの切り口に隙間がないからシミが入らない。あれはシミと埃を防ぐための手段でもあったという説明もあります。だからお金がない場合には三方金をやめて，上の切り口だけの天金にする。それでもだいぶ違う」（p. 5）なるほど，それで保存状態が良好なのかと考えさせられた次第である。

（1996. 9. 2.）